希望を耕す

最終講義

東京大学 特任教授・建築学
松村 秀一
Shuichi Matsumura

昭和三十八年二月二十五日

本連載のなかで紹介したこともあったが、日本で最初の超高層とも言われる霞が関ビルの計画から竣工までの経緯を、当時の東映オールスター・キャストで描いた「超高層のあけぼの」（一九六九年公開）という映画がある。

この映画の冒頭の場面は、私にとっては些か興味深いものだ。その場面とは、昭和三十八年二月二十五日、古川善治教授という人物の東京大学での最終講義の場面である。古川は建築構造学の教授という設定であり、この最終講義では日本における超高層建築実現の夢を語り、その夢を学生諸君のような若い世代の建築技術者に託すという主旨の話で締めくくる。

実際、昭和三十八年二月の時点において、日本の建物には三一㍍という高さ制限が設けられており、超高層ビルは一切建設されていなかった。ところが、この年の七月に建築基準法の改正が行われ、容積制を採用した地区では、その容積の範囲内なら建築物の高さが三一㍍を超えても良いことになったのである。まさに映画においてもこの史実通りに事が進み、古川は東京大学退官後、霞が関ビルのプロジェクトに加わることになった。

さて、この古川は劇中の役名に過ぎないが、実在の東京大学教授、武藤清（一九〇三－一九八九年）がモデルだったことはよく知られている。劇中の最終講義での古川の話の内容が、現実世界の武藤のそれと重なるものなのかどうかはわからないが、名優中村伸郎演じる古川の話は、いかにも最終講義らしく、「さもありなん」と頷かせるものであった。

ボローニャ大学における1350年代の講義風景を描いた写本挿絵。Laurentius de Voltolina絵、ベルリン国立素描版画館所蔵（提供：AKG/PPS通信社）

思い出される講義

何が最終講義らしいかと言えば、自分の学生時代の話に始まり、残された課題、これからの若い世代への期待で終わるという構成がである。

もちろん、最終講義の構成にはそれぞれの教授の個性が表れ、多様であり得るが、この映画のなかでの古川の講義のような構成をとる場合が一般に多い。

長らく大学にいたものだから、私自身は相当な数の退官教授（国立大学の時の呼び方）、退職教授（国立大学法人になってからの呼び方）の最終講義を聴講してきた経験があり、研究者人生・教育者人生を振り返る構成が多いことを知っているし、その構成が好きでもあった。

いくつか印象に残る最終講義の内容を披露しておこう。

先ずは、世界的な建築家として今もご活躍の槇文彦先生。先生の最終講義の始まりは、人生最初に心動かされた建築の話だった。東五反田の辺りで育った槇先生の幼少期、今ではビルやマンションも立ち並ぶ周辺地区にはまだ殆ど目立つものは建っていなかった。そのなかに一際目立つ白くて四角い建築があった。それが大正期から活躍していた建築家土浦亀城の自邸だったという話である。私の頭のなかでは結び付いていなかった、世代の大きく異なる二人の建築家が、このような絆で結ばれていたことはとても意外で、最終講義らしい話として私の記憶に刻まれた。

槇先生の一～二年後だったと思うが、今度は鋼構造の分野を先導された加藤勉先生の最終講義があった。たまたま私の隣に、当時建築構造設計者の世界で他を寄せ付けない作品を次々に実現していた木村俊彦さんが座っていらした。加藤先生の若い頃から退官までを貫いた研究テーマに関する講義が終わった時、木村さんが「実にフォーカスのしっかりした研究だ」と呟かれたのを聞き、建築構造に関する学者と実践者の何とも清らかな関係を初めて知った。

次は少々新しく、また建築ではなく土木の方の最終講義になるが、地盤工学の東畑郁生先生の講義。東畑先生は自身の研究課題を時系列で振り返りながら、その時々に訪ねた世界各地の特徴的な地質関係の写真を見せてくださった。建築分野では、人の住んでいない地球上の場所の写真をこれほどに続けてみることはあり得ない。実に新鮮な体験であったし、時に近いようで遠い彼我の根本的な違いを見た思いがした。私の世界理解にとっては重要な最終講義だった。

私事で恐縮ですが

さて、本誌がお手元に届く頃、二〇二三年二月二十日、かく言う私自身が、東京大学での最終講義を行っている筈である。本稿はその二カ月前に書いているが、いまだ内容は未定である。

槇先生のような鮮烈な建築との出会いの経験もない。加藤先生のようにフォーカスのはっきりした研究を継続してきた訳でもない。東畑先生のような大きな研究対象にぶつかってきてもいない。こんな取柄のない私ではあるが、何とか未来に繋がる話題を提供できていれば幸いなことである。